

ホームページアドレス▶<http://www.iwate-ia.or.jp/>

Iwate International Association 2009



財団法人 岩手県国際交流協会



2009いわて国際交流

Vol.68



特集▼岩手の食がはぐくむ国際交流



食べ物に 人の悩みや喜びを思う

大地を守る会会長

藤田

和芳

さん
(岩手県奥州市出身)



食と環境のつながりにいち早く着目し、日本で最初に有機野菜の生産者と消費者を結ぶネットワーク「大地を守る会」を設立。現在はその活動を世界の農民へと広げる藤田和芳さんに食を通じた世界とのさまざまな交流についてうかがいました。

アジアとの交流

私たち「大地を守る会」は日本の農業を守る、第一次産業を守ることを第一のポリシーにしています。この国の食料自給率はわずかに40%です。まだまだ農産物を作る土地もあるのに、高齢化で後継者がいない、農家は儲からないなどの理由で自分たちの土地を余らせたまま、海外から安い農産物を輸入している。これは国際的な考えからいってもおかしい。日本が次の世代になっても飢えることのないように、しっかりと日本の農家を支える必要があるのではないかと。

2009いわて国際交流

Iwate International Association 2009 Vol.68

Contents

- 01 大地を守る会会長
藤田和芳さん インタビュー
- 05 特集
「岩手の食がはぐくむ国際交流」
- 12 Close Up
- 13 講演録
2008ワン・ワールド・フェスタinいわて
「NORAライブ&トーク」
- 15 協会からのお知らせ



表紙写真/NORAライブ&トーク
(2008ワン・ワールド・フェスタinいわて)



パレスチナに造った1.3kmの平和の農道

そのために「大地を守る会」で生産者と消費者を組織してきました。とはいえ、日本では生産できないものもあります。たとえばコーヒーや香辛料、バナナなどは海外から輸入しなければなりません。海外の農民との交流は、こういった作物の輸入から1990年にスタートしました。始めるにあたってまず、差別的な取引で買いたくようなことはあってはならない。フェアトレードでなければと考えました。

また輸送エネルギーのことを考えれば、地球の裏側からもってくるのではなく、近くのアジアの人々から食べ物をいただくべきだろうし、海外であっても生産者とは顔の見える関係でいたい。であれば人間としての交流を大切にするために、アジアの人がいやがるような従軍慰安婦の問題や靖国参拜の問題なども含め、自分たちがどのような気持ちで相手とかわかるとのかということも考えたい。農業を通じての交流も大切です。日本の有機農業は狭い土地で高い生産量を上げるなど、優れた技術を持つているので、そのような技術の交流をしたい。特に、アジアの若者に、キノコ作りの技術や畜産、稲作、花卉かきの技術などを勉強してもらうために、我々のメンバーの農家で研修してもらおう制度もつく

りたい。農業は文化や芸術ともつながっているのです。踊りや衣料品、焼き物などの文化の交流もしたい。そうやって関係性を強めていくことが大事なのではないかと考えました。

オリーブオイルとパレスチナ

現在、海外との取引は、売り上げの3割程度です。コーヒーは東ティモールからいただいています。が、これも紛争が続いていた東ティモールの復興のために私たちは何かできないかという思いで、コーヒーの輸入を始めました。コーヒーを買ってその売り上げの1割で、文房具やスポーツ用品を購入し地域の小学校に寄付しています。大地を守る会の会員のなかでも東ティモールに関心があり、東ティモールの子どもたちに心を痛めたりする人が、コーヒーを飲むことで東ティモールとかわるようになるわけです。

オリーブオイルは、現在、パレスチナからいただいています。パレスチナは聖書にも書いてあるオリーブオイルのルーツの地であり、政治的な紛争が長く続いている地域です。私も何度も行っているのですが、イスラエルの占領下でも厳しい検問があり、出入りするのも大変なところです。それで

も、同じオリブオイルを食べるならパレスチナのを食べたい。オリブオイルを一滴たらずごとに、パレスチナとイスラエルの紛争に心を巡らせる、ニュースを見る、新聞を読む、そんなことでかわっていきたいと思う人が私たちのメンバーにたくさんいます。

何年前か前、もつとパレスチナの人と交流を深めるために消費者を連れてパレスチナに行きました。皆でオリブ畑を見学したのですが、斜面になっている畑は上に行けば行くほど荒れているんです。「なぜですか？」と聞いたら、あそこの上にはイスラエルの人たちの入植地があり、彼らが農作業をするために上にいくとライフルを撃つてくると言うのです。イスラエルの入植者たちにも子どもや女性がいて、ゲリラが登ってくるかもしれないという恐怖心で撃つてくるのです。オリブ畑は岩のがれきのようなところで、彼らは貧しいのでいまでもロバを使って収穫しています。その姿がゲリラではないかと誤解されるのです。私はここに農道があればいいのにと思いました。道があれば軽トラも入れるし、農道を使って農作業をしていけば、ゲリラと思われて撃たれることもないのではないかと。農民の人たちに「ここに農道を造ればいいじゃないか」と言っ

てみました。彼らが言うには、農道を造るには1^キで100万円くらいかかることでした。100万円くらいならうちの組織でなんとかなるかもしれないと思い、日本に帰ると大地を守る会の会員に相談しました。

私たちは銃を持ってパレスチナの人を支援することはできないが、農道を造ることだったらできるじゃないか。平和の農道をパレスチナに造ろうという呼びかけをしたら、1週間で1500人が10000円を寄付してくれて150万円が集まりました。このお金を持ってまたパレスチナに行き、「これだけの人がパレスチナに農道を造って欲しいと言っている」とお金を渡したら、すごく喜んで、すぐ造ると言ってくれました。

そして翌年の11月に私がパレスチナにいった時にはもう立派な農道が13^キできていました。150万円が13^キしかできなかったよ、といっていました。とても喜んでもらえました。我々のやっていることは、食べ物を通じてそこで生きている人の悩みや喜びに思いを巡らすことです。それがお互いの文化度を高めることだし、生きがいがあることにつながります。今、ガザが大変な被害を被っています。私たちはオリブ畑がある西岸地区の農家の人やNGOに協力して

もらい、生活に必要なさまざまなものをセットにしたフードバスケットを大量につくっています。そして大地を守る会の会員にフードバスケットをガザ地区に送ろうという呼びかけを始めました。わずか1週間で430万円ものカンパが集まるくらい多くの人の協力を得られました。これに賛同した人たちは普段からオリブオイルを食べ、我々が発信するニュースを読み、パレスチナのことを考えている人たちなのです。

宇宙から盛岡はどう見える？

自分のいる場所に立っているだけだと、なかなか自分の良さは分かりません。岩手に住んでいる人も、たまには東京にできて岩手を見るとか、外国にでて日本を見る機会があったらいいと思いますね。例えば岩手で畜産をやっている人だったら、同じ畜産でも韓国の人たちはこんな畜産をやっているし、ウランバートルの人はこんなやり方をしている、ヨーロッパはこんな畜産をしているというところを知れば、「私の畜産はこの部分に進んでいるじゃないか」とか「彼らにはこんなアイデアがあったのか」と感動するでしょうし、生きていく上で、仕事で感動とか面白さが生まれると思います。

私たちは100万人のキャンドルナイトという夏至と冬至に2時間電気を消す運動を呼びかけています。世界中で夜の8時から2時間電気を消せば、日本、韓国、モンゴル、トルコ、イラン、ヨーロッパ、くるつと回ってアメリカと時差の関係で順番に消えていく。これを宇宙から見ると暗闇のウエーブが地球上に現れることだよな、と思ったんです。自分のささやかな行動がいろんな人とつながっていくと、暗闇が動くのが宇宙から見えるのかもしれない。これは大きなロマンです。今、盛岡に住んでいて、盛岡という町を宇宙から見たらどう見えるのか、地球はどう見えるのか、というように物事を考え、そのために地球のなかにいる自分はどういうことができる



増上寺でのキャンドルナイト



バリ島の女性舞踊レゴン

のだろう。このように思うことはとても大事だと思います。時間に関しても、インスタントラーメンのように3分とか短い単位でモノを考える訓練は日常的に

やっているのですが、1000年という単位でモノを考えるとという訓練ができていない。例えば1000年という単位で地球はどうなるのか、人類はどうなるのか、

幸せとは何かということを考える訓練をしていると、全く違った自分とか地域が見えてきます。

自然や資源 人の豊かさ



【藤田和芳さんプロフィール】

1947年奥州市の稲作農家の次男として生まれた。上智大学法学部卒業。75年に有機農業普及のためのNGO「大地を守る会」設立。77年には、大地を守る会の流通部門として、社会的企業のさきがけとなる「株式会社大地」(現 株式会社大地を守る会)設立。有機農業運動をはじめ、食糧、環境、エネルギー、教育などの問題に対しても活動を展開。90年に国際局を設立し世界各国の農民との連携も深めている。現在、大地を守る会会長、株式会社大地を守る会代表取締役、「100万人のキャンドルナイト」呼びかけ人代表、アジア農民元気大学理事長などを兼任。

▶大地を守る会ホームページ <http://www.daichi.or.jp/>

農民こそ人を感動させられる

岩手は自然豊かな地域、食料も他に依存しなくても、ある程度はやっていける地域社会です。大事にしてもらいたいですね。岩手から飛び出してきた私が言うのは、少し矛盾しているのですが、私たちの地域にある資源や人間関係、自然を信頼して、そこに依って生きていこうと腹を決めたときに、人は豊かになるのではないかと思えます。自分のところにはない資源を「あれもない、これもない」と言いはじめると、それが不満にな

るし、劣等感になる。そのことが幸せ感を喪失していくのではないかと。

バリ島はケチャやレゴンといったダンスや絵画、焼き物などのアートのレベルが非常に高いことで有名です。担い手はすべて農民です。彼らは日が昇ると同時に農作業を始める。日中は暑すぎるので家にもどり、夕方、また農作業をおこなう。その間に踊りの練習をし、絵画や焼き物を作っているのです。

私はバリの人たちに「なぜ踊りが世界的レベルなのか、なぜ人々

を感動させられるのか」と聞いたから、いとも簡単に「私たちは農民だからだ」と答えたのです。「私たちは朝早くから畑にでていき、そこで小さな虫や小動物の動きを見て、生命の息吹を自分の身体に入れます。あるいは稲などの作物が成長するのを見て感動し喜ぶ。外国人と会って話したときの感動とか、生きていることの感動を感じてそれを自分の踊り、目の動き、腰の動き、手の動きに表現します。私たちは小さなときから基礎的な練習をしているので、どんな動きもできる。でもそれだけでは人を

感動させることはできない。今日、新しい命にふれた感動を指先に目に表現し、それが人を感動させるんです。これは農民だからできることです」。

こんな話を岩手の農民にも聞かせたいんですよ。農民だからこれだけ人を感動させることができる。それも世界的なレベルですよ。農業はすばらしい職業なんです。

岩手は自然が豊かで、心豊かな優しい人間がいる。それを信頼して、ここで生きていくんだ、と人々が感じ始めたときに、岩手は豊かになると思います。